

私は第21代高校生平和大使を務めています、諫早高等学校2年の山西咲和です。私の祖母は13歳の時に長崎で被爆しました。祖母は皮膚がただれた人や、眼球が飛び出した人、頭のない赤ん坊を抱えたまま佇んでいる女の人を見たと言います。また、原爆の日の翌日からは学校の友人の追悼式が毎日行われ、祖母の学年の半分の友達を失いました。この話は今年になって初めて聞きましたが、あの悲惨な出来事を二度と起こしてはならないと強く思いました。それからたくさんの方々の被爆者の方々の話を聞きましたが、「私たちは人間らしく死ぬことも、人間らしく生きることも許されなかった。生きることの大切さを考えてほしい」「核と人類は共存できない。世界中の人々が手を取り合って、平和な世界を築いてください」という言葉を私たちに託してくださいました。被爆者が差別や偏見、原爆後遺症と戦いながらあの日の辛い出来事を語ることで、私たちに今の生活を築いてくださったと思っています。そして、私には被爆者の方々が繋いでくださった“平和のバトン”を受け継ぐ意思があります。

核兵器が存在する限り、使われる可能性は決してゼロにはなりません。今後の世界の動き次第では使われてしまうことがあるのではないかと思います。また、核兵器の小型化などの開発は常に行われています。

日本は唯一の戦争被爆国でありながら、核の傘に守られています。非常に難しい立場にあるとは思いますが、核兵器がもたらすものは「破壊」と「絶望」しかないのだとよくわかっているはずですが。だから核兵器のない世界がどうやったら実現できるのかを、被爆者の声、市民の声を聞いた上で、世界各国の先頭に立って考え、実行して欲しいのです。私は核兵器や戦争の恐怖にさらされず、誰もが安全に生活できる世界で生きていきたいのです。そのために、これから生きる若者として声を上げ続けていきます。

賢人会議の皆様が被爆地や被爆者の願いをしっかりと受けとめていただくよう期待します。